

平成30年5月26日(土)

老球の細道414号

名将とは

会津バスケットボール協会 室井 富仁

日大アメフト事件、レスリング伊調選手パワハラ事件と監督、指導者のあり方が問われるようなことがスポーツ界で起こっている。勝ち続けるのが名将なのか、トッププレイヤーをコントロールできることが名将なのか。

先週の朝日新聞書評欄では「名将とは」というテーマで3冊の書籍を紹介していた。その中の1冊に、バスケットボール史上最高のコーチと称されるジョン・ウッデンの著書『元祖プロコーチが教える育てる技術』（ディスカバー・トゥエンティワン）がピックアップされていた。私も数年前に購入して何度も読んだ名著である。本書に記される「成功の哲学」「成功のピラミッド」などは指導者講習会で何度も利用させてもらった。

新聞の書評には次のように書かれてあった。

【『育てる技術』は、アメリカバスケットボール界では知らぬ者がいない名コーチによる箴言集。大学バスケットボール界史上最高のコーチと言われる彼は、私の強い選手やプライドの高い選手たちをいかに強調させていくといった組織論に秀でている。名将は相手かわからないものを、相手にわかるものに置き換える比喻がうまい。ウッデンもそうだ。スポーツのチームプレイを映画作りに譬える。偉大な俳優や女優だけでは名画は作れない。名作にはセリフのない役者も、優秀な照明や脚本家やメイク、音楽などの担当者もいる。主役が素晴らしい演技をしているのに映画としては失敗作だというケースはいくらでもある、と説く。目標は最高のチームを作ることでありスターを作ることではない。ビジネス本としても白眉である】

先日、福島県のJBA公認コーチ講習会で「指導者の役割」の講義を担当した。その際にこのジョン・ウッデンについて知っているかどうかを受講者に質問したら、150名の中でほんの数名しか知らなかった。時代の流れを感じる。

名将とは、チームを勝たせ、選手を上手にさせ、人間的に尊敬されたりすることはもちろん、自身のコーチングフィロソフィーを確立していることが条件だと思う。そのような意味からジョン・ウッデンは名将中の名将である。

1960年代から70年代にかけてUCLAのH・Cとして全米学生選手権(NCAA)大会で10回の優勝(7連覇)の前人未到大記録を残している。米国のスポーツ誌においては20世紀全てのスポーツにおいて世界NO1コーチの評価を得ている。彼のもとでプレイした選手たちから「ウッデンのもとでバスケットボールをプレイすることは特権である」と最高の賛辞も受けている。私も選手に言ってもらいたかった一言である。

ジョン・ウッデンのコーチングフィロソフィー3原則は①勝つことより、最善を尽くすこと②チームワークを重視③能力の開発より人間性の重視。

歴史学者の小和田哲男さんは言う(「公立共済組合友の会だより」より)。

【歴史は鏡であると言われる(平安時代の『大鏡』鎌倉時代の『吾妻鏡』)。過去を鏡に映し未来を照らす。過去は単なる過去ではなく、未来のための過去になる。過去と現在と未来がつながり、自分の生きざまを色々と設計するために過去がある】

迷ったらジョン・ウッデンに還る。昨今問題の勝利至上主義の悪弊を葬り去る。